



箱根の食物連鎖異聞 —鹿が殖えてアサギマダラが稀に—

photo by 三川 節子

田代 道彌

箱根に見られなくなった蝶

鹿が殖えて蝶のアサギマダラが稀になっている。近頃箱根でささやかれる自然界の異変の話である。大風が吹くと桶屋がもうかると云うのはすでに昔語りになったが、こちらアサギマダラの著しい減少は、この蝶が吸蜜に訪れるハコネヒヨドリ（ホソバヨツバヒヨドリ）のシカによる食害で花期に見なくなったことによる。つまりシカの増殖—ハコネヒヨドリの減退—アサギマダラの衰退へと連鎖が続いているのである。ハコネヒヨドリは箱根など周辺高地に分布するのみで普遍的な種類ではない。箱根高地でも自生状況は点在しがちで、これがシカに食害されると根生葉まで失い、その年の開花は見られなくなる。そこでアサギマダラは重要な吸蜜の対象を失って、結果として個体数を稀にしているのである。

ハコネヒヨドリとアサギマダラ

シカの食害で姿を消したと見られる箱根の植物ではキソエビネなどを筆頭に決して少ないものではないが、そのような極めて個体数が稀なグループはひとまず別にして、かつては箱根高地の草地に普通に見られたハコネヒヨドリの食害による減退は、ただアサギマダラが稀になっただけにとどまらない意味があるように思われる。

ハコネヒヨドリは、フジバカマなど同属のキク科の1種である。日本のこのグループにはヒヨドリバナ・ヨツバヒヨドリなど草丈は1-2mに達し葉や茎も剛壮な一群と、これには対照的に草丈は1m以下で茎や葉も小形で優しいサケバヒヨドリ・ヤマヒヨドリなどの古種群があって、ハコネヒヨドリは草姿からも分布の狭い点からも後者に近い。つまりハコネヒヨドリは箱根の植物としても、衰退させてはならない1種なのである。



photo by 田代 道彌

シカ防護柵の設置を

先日信州霧ヶ峰を歩いて、シカの食害によって極端に消滅しかけていたニッコウキスゲはじめ各種の群落が、すでに昔日に変わらない程に回復しているのを見て内心一驚した。これはシカ被害防護柵の効果である。箱根では山麓に近い地域ではシカの捕獲などに効果が現れているものの、高地のたとえば植物群落の保護や電柵などの施設にまでは、まだ配慮されるに到っていない。危機ばかりが叫ばれている中で、むしろ積極的な防護柵の設置が、検討されるべき時であろう。

神奈川県立生命の星・地球博物館名誉館員 勝山 輝男

ハナヒリノキ *Leucothoe grayana* は高さ30～150cmになる落葉低木で、ツツジ科スノキ亜科、イワナンテン属に属します。種としては南千島、北海道、本州（近畿地方以北）、サハリンに分布します。葉は互生し、柄は短く、葉身は楕円形または倒卵状楕円形で、脈が裏面に突き出て、縁には細かい鋸歯と縁毛があります。北のものほど葉が大きく、南の方では小さくなる傾向があります。枝先に長さ5～15cmの穂状の総状花序を出し、淡緑色の壺状の花を多数つけます。

地域によりいくつかの変種が区別されています。北海道～東北地方のものは葉の裏面が白色を帯び、葉も大きくて10cmに達し、エゾウラジロハナヒリノキ（ヒロハハナヒリノキ）*var. glabra* といいます。本州中部の日本海側では葉が小さくなり、ウラジロハナヒリノキ *var. hypoleuca*（写真1）に変わります。本州中部のやや標高の高い山地岩場に生えるものは、葉の裏面が白色を帯びず、全体に小型で葉も小さく、ヒメハナヒリノキ *var. parvifolia* として区別されます。

箱根・丹沢・富士山・愛鷹山の火山荒原や風衝地に生えるものは特に小型で、葉は長さ2～6cm、葉の縁には長さ1mmぐらいの縁毛が生え（写真2）、ハコネハナヒリノキ *var. venosa* として区別されます。ハコネハナヒリノキはハナヒリノキやヒメハナヒリノキと葉のサイズでは重なってしまい、区別が難しいのですが、葉の縁に生える毛が顕著に長いことは良い特徴と思います。

ハコネハナヒリノキは箱根では駒ヶ岳、神山、大涌谷、二子山、金時山などに生育しています。大涌谷の自然研究路沿いには、アセビとリョウブが優先した風衝低木林が成立していましたが、2015年の大涌谷の噴火により多くの樹木が枯れました。ハコネハナヒリノキはこの火山荒原でいち早く回復し、開花結実する株を点々と見ることができます（写真3）。

ハナヒリノキは有毒植物で昔は便所のウジを殺すのに利用されました。「はなひり」はくしゃみのことで、この植物の葉を粉状にしたものが鼻にはいるとくしゃみが出たことから名づけられたと言われます。



写真1. ウラジロハナヒリノキ 2019.8.5 長野県八方尾根



写真3. ハコネハナヒリノキ 2023.6.19 大涌谷自然研究路



写真2. ハコネハナヒリノキ 葉縁の毛 2021.6.21 金時山

エンゲルベルト・ケンペル協会Lemgoと ケンペルとバーニーを讃える会シンポジウム

エンゲルベルト・ケンペルが日本とドイツの自然史と自然保護に与えた影響
箱根を守る会 理事 三川 節子

毎年、箱根旧街道のケンペルとバーニーを顕彰する石碑の前で「ケンペルとバーニー祭」を開催しています。今年で37回を数えていますが、ケンペルの名は意外と知られていません。ケンペルはオランダ商館付き医師として日本にきた350年も昔のドイツ人です。彼は長崎出島から江戸へ將軍謁見のため二回東海道を往復しています。一番の難所である箱根山は都合四回通ったことになります。この旅で見聞したこと採集した標本等、帰国後「日本誌」を著し初めて日本をヨーロッパへ知らせしました。

幕末から明治初期に日本を訪れたヨーロッパの人たちにとってケンペルの日本誌は日本への入門書であり、好奇心と憧れさえ持ったようである。

ケンペルはドイツ北部の町、レムゴの人です。レムゴには今も彼を誇りとし敬愛する市民が多く、「エンゲルベルト・ケンペル協会Lemgo」が組織されています。箱根の「ケンペルとバーニーを讃える会」「箱根を守る会」と長年交流を重ねています。

今年7月レムゴで自然史と自然保護のシンポジウムが開かれ、箱根から4名(勝山輝男、一寸木肇、石原和美、三川節子)が訪独しました。元県立生命の星・地球博物館学芸部長の勝山輝男氏が植物の専門家として「日本の植物研究に対するケンペルの影響」を、そして大井町教育委員会の一寸木肇氏が長く教職に就かれていた体験をも踏まえた具体的な「日本の自然保護におけるケンペルの重要性」を講演しました。言葉の壁がありながら活発な意見交換があり、個人的な理解も深め、初めての試みとして大成功であったと思います。この大会の企画、設定をしていただいたのが、クリス・ブリュンガー氏です。彼は越谷市在住のドイツ人で医師です。クリス氏のサポートなくして成功はなかったと痛感します。我々4名から改めて御礼申し上げます。医師のクリス氏の講演は「ケンペルが日本の医学に与えた影響」。

終了後、クリス氏と我々はニコライ教会のケンペル碑とケンペル公園の石塔に献花しケンペルが結ぶ縁に祈りを捧げました。

又前日にレムゴ市長を表敬訪問し、箱根町町長へのメッセージ、レムゴの本を頂戴しました。通訳の現地在住、熊井清一氏、木戸鉄氏に感謝申し上げます。

ゲルハルト・キューバルト氏を始めケンペル協会の皆様には滞在中、細心且つ暖かいおもてなしを頂き心より感謝申し上げます。これを機に両会、レムゴと箱根、ドイツと日本がより一層の友好関係が築かれることを期待します。



シンポジウム



レムゴ市長表敬訪問



レムゴの街

ツキノワグマとの共存をめざして

箱根を守る会 理事 近藤 正樹

今年のケンペル・バーニー祭の記念講演には信州ツキノワグマ研究会の中下留美子さんに講演をしていただきました。信州ツキノワグマ研究会は信州大学理学部（松本）の4人の教授と学生・市民から成る自然保護を考える NPO 法人。中下さんは、1996 年に活動を始めた時からのメンバーの 1 人で、現在は筑波市にある森林総合研究所で主任研究員を務め、「炭素・窒素安定同位体比」による分析からツキノワグマは山の植物を食べて暮らしていることを突き止めた方です。

ツキノワグマは、平常はおだやかに暮らしていて、ヒトの気配を感じると少し離れた所から観察しています。ただ、子連れの場合の防衛や、同じ資源を求める山菜取りのヒトと急に出会った場合などは、ヒトを攻撃してきます。クマに出会って睨めっこをした場合や、後ろ向きで逃げた場合など被害を受けた例が多々あります。そこで、信州ツキノワグマ研究会はツキノワグマの生態を調査し、殺さずにクマを避け合うための工夫を考えてきました。テレメーターによるクマの行動追跡、電気柵設置、ワナで捕えたクマを麻酔し、計測し、発信器を首に装着した後に山中に放獣したり。その際には唐辛子スプレー（カプサイシン粉）を吹きつけることで再会を防ごうと試みたり。現在では、クマとの共存、クマの生活上と距離を置くことを中心にしての対クマ教育にまで発展してきました。幼稚園・保育所・小学校に出向いてのツキノワグマについての勉強会も行っています。

講演では次のような要点が語られました。ツキノワグマはドングリや野菜を食べます。冬を越せずに死亡したシカやカモシカの肉を食べることも。動物を食べるための狩はせず、冬は脂肪を蓄えて冬眠をし、冬眠中に出産します。山仕事が減り、林縁が人里近くまで広がってきてクマの生活域とヒトの生活域とが重複して、クマに出会う機会が増え、人身事故も増加。山の幸が不足した年には人里に出易いので、クマと共存可能な知恵を普及する活動が多くなったと。また、クマは利口な動物で、ヒトの生活を学習してしまうと危険な場合も多く、人慣れしてしまったクマを放置しておくわけにもいかず、また、クマが殖え過ぎても困るので、適正な密度を保ちながら、生活域が重ならないように配慮してクマと共存できるよう工夫していくことが課題だと話されていました。この結論は昔の古老が伝えてきたことと同じです。しかし現代版として、基礎知識を構築した上での結論で、科学的知識を基礎にした保全活動のお手本のような講演でした。現代版自然保護活動の鑑としたいお話でした。

私も信州でツキノワグマとニアミスをしたことが幾度かあります。ハチミツでアリを誘って調査をしていた時です。後ろの方からミシミシと枯枝を踏む音が聞こえ、キノコ採のおじさんが来たと思いました。通常 2 人で来るはずですが、1 人だけのようです。調査中のハチミツ皿を回収して立上ると 20m 位後ろにいたクマが驚いて笹藪の中を逃げて行きました。



お知らせ

箱根を守る会広報誌は年 2 回の発行になりました。イベントのお知らせ、会報誌のバックナンバーは下記 URL から閲覧いただけます。

<https://hakonemamoru.localinfo.jp/>



はこね

発行

箱根を守る会 会長 川崎英憲

箱根町湯本 386-66

TEL 0460-85-8355

e-mail hidenorikawasaki@mti.biglobe.ne.jp

箱根を守る会は、随時会員を募集しています。

箱根の歴史や自然を知り、それを保護していく事の大切さを皆さんと考え行動します。箱根が魅力ある観光地であり続けるために！

お問合せ：0460-85-8355 事務局 まで。

年会費 2000円